

魚どもにも生きて来た八戸で、「魚を食べる」ということについて、今、考えてみたい。

魚ラボ新聞編集部

魚ラボ新聞創刊によせて

昭和の頃には、まちのあちこちに魚屋があった。大きなまな板の上で、魚はあれよあれよと腹を割られ、臓物を除かれ、解体されていった。

木のまな板が真っ赤な血で染まり、その血は内蔵とともにホースの水でざばっと洗い流された。かつて、台所や魚屋は、命にもっとも近づける場所だった。

いつしか、魚を家で捌くことはなくなり、魚が魚の形でなくなるプロセスは、日常から遠く離れた場所のことになった。

魚をおいしく食べるには手間がかかる。手間をかける魚はおいしい。そして美しい。

魚ほど、視覚的にもおめでたく祝祭的な食べ物ほかにないかもしれない。

その祝祭性は、人々が毎日の生活の中で、自ら刃物を持ち、命あるものをいただくという行為を通して、生まれていったのではないか。

生臭いから、始末が悪いから、骨があるから、さばけないから……日本人は魚を食べなくなった。

いつしか魚は、食卓から遠ざかった。魚が食卓から消えていくのと同時に、置き忘れて来たことがあるような気がしてならない。



写ギョッ

人を獲る人 魚を食う人
田附勝が撮る八戸



写真家 田附勝

●プロフィール
1974年生まれ。富山県出身。写真集に2007年『DECOTORA』、2011年『東北』、2013年『KURAGARI』があり、『東北』で2011年度木村伊兵衛写真賞受賞。現在は、縄文をテーマに撮影を続けている。

はっち4階のライブラリーには田附さんの写真集「DECOTORA」木村伊兵衛賞を受賞した写真集「東北」があります。ぜひご覧ください。

魚を獲る、魚を食べる、魚をめぐる暮らし……。『東北』の奥深くに存在する東北独特の暮らしに迫る気鋭の写真家田附勝氏が春夏秋冬、八戸のさまざまな場所を撮影していきます。浜のなりわい、まちなかで魚を調理する人たち、食べる人たちなど……。魚を食べることに関わる多彩な人々の姿が、作品の中に浮かび上がってきます。

魚ラボード完成!

魚ラボードは、魚ラボのさまざまなお知らせをする移動黒板です。赤い吉次色のボードには、はっちフィッシングで噂になっている情報や、次回魚ラボ会のお知らせ、また、八戸港などの水揚げのニュースなどが満載です。

通常は、はっちひろばにあります。三日町の通りからもガラス越しにご覧いただけますが、裏面の情報もお見逃しなく。みんなながらで「魚」を仲立ちに、ゆるやかにつながり、八戸のまちを楽しんでいきましょう。

田附勝さんに聞きました

魚ラボ 今、どんなものを撮影していますか？

田附 縄文遺跡から出てくる縄文土器のかけらを撮っています。八戸の是川遺跡にも来たことがありますよ。

土器といつても、博物館に飾っているような状態を撮るのではありません。土から出て来たその瞬間を撮りたいんです。

かけらが土の中から現れるその瞬間に感じるものが重要なんです。数千年前の人が使っていた、その感触がそこにあるような気がします。

でも、そのかけらがこの世に出て来た瞬間にあつという間に土は乾いて

ていつて、1分も経たないうちに、我々の時間になっちゃう。数千年の時間を経て、さっきまでの時間にはその時代の空気をまとったものだったのに、あつという間にただの「モノ」になっちゃうんですよ。

そのかけらが埋まっていた土の層は、時代の人たちの喜びや悲しみの層でもあると思うんです。

そのかけらが出て来たときの感じは。音で言ったら「おーっ！っ！っ」という感じ。でもそれは、あついう間に消えてしま

います。

魚ラボ 撮影するとき心がけていることは？

田附 その場に生きてい

る人を尊重することが一番です。

その人が生活している場にカメラを持って入っていくのは、その人たちにとっては「異人」です。

2008年に出会った岩手県釜石市の漁師さんがいます。突きん棒で魚を獲ったり、山に入って鹿猟をしたりしているのですが、やっぱり初めは「なんだこいつ、またい

るのか」という感じに彼は思ったと思います。ぼくの存在が、彼の日常になったときに、一緒に鹿猟に同行しました。山の中を二人で話しながら

歩きました。そんなことをしていたら、2010年に「船に乗る？」と言

われました。

同じものを食べ、同じ空気を吸っていると思っ

たときに何か動くんです。

ただ、大切なのは、彼に対して「異人」であり続けることなのです。異人であるほうが、その人を撮影しなければ、ただの盗人になってしまう。

4月19日(土)
福島県立博物館にて